

# 有島武郎研究

— ファニー像にみられる聖性憧憬の考察 —

宮野光男

## 一

有島にとっての米国生活の意義を考える場合、様々の観点からその可能性を見出すことができようが、なかでも、有島のこの時期にみられる人間追究への志向は、有島の生涯を通じてなされた基本的な問題追究の端緒として位置づけることができよう。先に公にした拙論「有島武郎研究—フレンド精神病院における看護夫生活の意義の考察—」〔梅光女学院短期大学紀要Ⅰ〕文学論集(1) 昭三九・六〕では、この問題を、キリスト教倫理によって疎外された人間としての自己認識にもとづいて、それからの解放と、人間自体の中に存在の根拠を見い出さんとする試みの中に見ようとした。それと同時に、有島の、そのような意図にもかかわらず、生涯有島を離れぬ否定的自己認識としてのカインの末裔意識が、有島の内面に不可抗的に内在化してゆく過程を、患者スコット博士との交りを通して瞥見したが、本論では、その当時の有島が、人間追究への志向の一つの契機として、否定的自己認識の対極ともいへべき聖性への憧憬を抱いていたことを、少女ファニーとの交りを通して明らかにしてみ

有島武郎研究 — ファニー像にみられる聖性憧憬の考察 —

たいと思う。この試みは、有島の聖性憧憬の具体相とその特色を解明することでもある。

## 二

有島が少女に対して特別な感情を抱いていたことは、諸家の指摘するところである。とくに、本多秋五氏は、△有島の少女偏愛趣味は、アメリカ遊学時代から後半生まで一貫してみとめられると思うのだが、彼のいわゆるファニーやリレイに彼がささげた愛情にはただならぬものがある。▽とし、有島の少女たちに対する思いの△ただ事とは思えない▽ものが「フランセスの顔」、「迷路」を生み出す潜在力となったとされている。そして、さらに氏は、リレイ、ファニー、ティルダに対する有島の基本的な姿勢の背後には、△人が悉皆の歴史の衣を脱ぎすてて、ただ「人」としてのみ相対する境地、そこでの「真裸な人間」相互間の愛の交流という有島の独特な理想▽を見、しかもその理想が、有島のいかなるところに位置づけられるものであるか、△有島に特有な、この行きずりの、結合の可能性のない少女に対する異常な情熱は、それが有島の性格にとつ

て、ある本質的なものであるだけに、私にはよくわからぬ気がする  
のである。Vと述べておられるが、たしかに、有島の少女に対する  
異常なまでの関心の背後には、なおざりにすることのできぬ、有島  
にとっては、資質の面においても、生き方の面においても、顕著な  
特色があるように思われるのである。そして、このような、いささ  
か、揶揄的な響きをもっているA少女偏愛趣味Vの内容が、実は  
米國留学当時の有島にとっては、たとえば、十四才の少女が祈禱し  
ている姿を見て、A眞に赤兒の如くなりて道を受くるにあらざれば  
天國を見る事を得じと云はれし主の大訓の今更に思ひ出でられて余  
は彼女によりて痛く潔められたるを覚えV、さらにA人間にして清  
きものVの一つがA可憐無邪氣なる少女の微笑Vであるとの思いに  
至り、ついにはその中にA天人の面影Vを見るに及ぶという有島の  
思い〔八日記、明治三年（一九〇〇）十一月二日〕が、A赤兒の如  
き信仰を授け給へV〔八日記、明治三六年（一九〇三）四月二十九日〕  
という、有島自身の祈りに支えられた切なる願いであったことを知  
るときに、信仰に関わることがらとして考えられ、位置づけられな  
くてはならない内容を持ったものであるということができるのであ  
る。とくに、ファニーと愛称されている一人の少女は、

余は尚夢の中にある少女を題として神の如き一篇を作り度く思  
ふ。今に至る迄余が生之苦痛に満つる時、それを癒せしは何者より  
も少女なりければなり。〔八日記、明治三七年（一九〇四）七月二

八日〕

という、有島にとっては、瀬沼茂樹氏の指摘にあるように、いわゆ  
るA永遠の女性Vとしての面影を見い出すことができるかのような  
存在であっただけに、人間追究を志向する有島の内面にある、根源  
的願望の顕示の、一つの契機的存在として位置づけることができる  
のではないかと思われるのである。

作家にとって異性は自己開示の鍵である、ということであるが、  
有島にとっては、もしも少女が、そのような深い意味を持った存在  
であるならば、A異性VをA少女Vと置き換えることになるだろう  
が、はたしてそのことが可能であるかどうか、ファニーとの具体的  
な関係を通して考えてみたいと思う。

有島のハバフォード大学時代の友人アーサー・クロウエルの妹フ  
ランセス・ファニーというのは彼女の愛称である―との出合いは、  
明治三六年一月二五日、感謝祭の休暇を得た有島が、アーサーの  
招待を受けて、アボンデールという所にあるクロウエル家を訪問し  
た時のことである。この時の様子は、日記がわりに書かれた家族宛  
の書簡〔明治三六年（一九〇三）一月二八日〕に詳しく記されてい  
る。それによると、有島の訪問の動機は、A彼の家庭が人の聲遠き  
田園の中にあり、多くの小さき弟妹あり、其妹の一人は畫家なるを  
聞Vいたからだということであるが、実際に有島の注意をひいたの  
は、三男のウィリアムと、次女のフランセスであった。

ファニーも其兄（ウィリアム）に似たる顔ばせ美しく無邪氣可憐  
なる其容貌は實に天國にも見まほしき計りに御座候。〔中畧〕フ

アニーは眞に貰つて歸りたきほど可愛き兒に候。微笑を湛へたる顔ばせなど溶け相に御座候。此夜彼女と組になりてカルタを致し大に勝ち申候。又彼女の作りたる繪人形を澤山見せて呉れ申候。十三の少女が描きたるものとは思へぬ手際にて「御身は繪と音楽と何れを好き給ふ」と申候處「繪を好むこと甚し、音楽も好きなられども、出來得べくは畫家になりたし」と申候。畫家にふさわしき少女に御座候、確かに長女より上に出づ可く候。

さすがに、細やかな印象が、鮮やかに記されている。しかし、この時の有島の気持は、おそろく、まだ例の少女趣味を出るものではなかつたであろう。別離の悲哀を思い、△小生は彼女と相遇ふは―此地上にて―此數日のみなる可く候。一度彼女と別れば再び會ふ機会は與へられざる可く候。▽と、いささか深刻な面持で書いてはいるが、まだ有島の内面に、形而上的存在として定着はしていないであろう。それだからこそ、家族の者たちにも気軽に報告することができたのである。ところが△運命の不思議なる手▽は、有島とフアニーとの關係を、さらに、より深いものへと導いていったのである。

フアニーとの再会は、翌年の四月、有島が春の休暇を利用して、バルティモアとワシントンの見物をし、ついでにアボンデルのクロウエル家を訪問したときのことであるらしい。しかし、この時のことを記した家族宛の書簡〔明治三七年（一九〇四）五月二二日〕には、△午後二人の少女が花狩りに連れて行つて、林の中で兩手にあまる斗りの野の花を摘みました。米國に來てこんなことをしよう

とは夢にも思ひませなんだ。▽と簡単に報告されているだけで、フアニーという名前は出て來ない。あのように△貰つて歸りたい▽と思ったほどの少女の名前が出て來ないというのは、どうしたことであらう、と訝かられるのであるが、このことは三回目の訪問のときの報告でも同様である。

△心あつき招きのまに―、再びアボンデルなるアーサーの一家を訪ふ▽たのは、その年の六月二二日、大学卒業間際のことである。△暑氣と喧騒とにて不快を極むる都市の生活に得堪へ▽ることができず、△米國に來てより眞に親しみを覺ゆるは此家のみ▽〔家族宛書簡、明治三七年（一九〇四）七月一四日〕であるクロウエル家は、有島にとって、まさに憩の場であつたにちがいない。七月一二日までの約三週間にわたる長い田園生活を通して、有島は、労働の喜びを教えられるとともに、この家庭のなかにある暖い雰囲気は、家族的な交わりに欠ける孤独な米國生活を癒やされたことであらう。アーサーの父が、大学に提出する論文の△訂正▽をしてくれたこと、あるいは、落ち着いた良い環境の中で、トルストイ、メーテルリンク、ダンテなどの作品や、ミレーの伝記など、△思ひしより夥しき讀書▽をすることができたことも、ここでの生活の收穫であつた。しかし、△運命の不思議なる手▽によって、まためぐり遇うことのできたフアニーについては、この書簡でも、

夕暮の殘陽尚残れる頃には少女等に伴はれ、野生の苺や櫻の實を取りに森の中に分け入り申候。小禽の雛をはぐくむ聲諧々たる間に、器に盛り上るばかりの收穫を得て、明日の朝食の膳には色鮮

かなる果物を供するが少女の務めに御座候。

とのみしか記されていないのである。書簡でみるかぎり、ファニーは失なわれた存在となってしまうのである。しかし、このような、いささかそっけない書き方にくらべて、日記の中に見られるファニーへの思いの表出は、まさに霄壤の差のある人ただごととは思えないVものとなっているものであることを知ることができるのである。

嗚呼彼處は樂しき處なりし。されども一の悲み殘されぬ。余が酷愛せし彼女は既に少女にあらずなりぬ。時とは如何に不可思議なる力なるよ。彼は天使の如き單純なる小兒を化して地の暗影深き人たらしむ。神知りませり、余は幾度か彼女の上を泣きぬ。されはれこは人の避く可からざる運命なり。彼女は依然として余を酷愛せり。されども悲しきかな余の頑なる心は彼女の少女たりし時の回想のみを以て彼女の上に熱き愛情を傾け得るのみ。〔日記、明治三十七年（一九〇四）七月一九日〕

もち論、日記と書簡との差を考えにいれなくてはならないことは当然のことである。しかし、日記にしかな書けなくなってしまうファニーであることにも注目しなければならぬであろう。このところには八時Vによって失なわれた十三才の少女が、有島の内部に深く取り込まれ、内面化され、新しい形而上的ファニー像として形象化されているということができないのではないだろうか。

このような、一種の虚像としてのファニー像が、有島にとって、

より重要な位置をしめるようになったということは、以後の有島の人間追究を志向するその具体相を考察するための一つのポイントが定まったことにもなる。それは、有島が米國を離れ、弟生馬とともにヨーロッパに向う船の中で書かれた日記〔明治三十九年（一九〇六）八月三〇日～九月一三日〕が、八ファニーに捧ぐVという献辞が掲げられているけれども、たとえ八いとしきファニーよVと呼びかけつゝ書き記されたものであっても、その内容が、實在の少女ファニーに語らるべき内容とは云い難い内面の告白であることが、ファニーの虚像性を証明する資料の一つであると思われることから明らかであるが、もし、そうであるならば、有島の内面にみられるこのファニー像の変化というものは、かつて自然に対する有島の変化がそうであったように、有島の内面の変化、あるいはその可能性の一つの顕現であるということができるのである。

虚像としてのファニー像に写し出された有島の内面の理解だけではなく、現実のファニーとの交りを通して知ることのできる有島についても、それが「フランセスの顔」の素材として生かされていることから、等閑に付すことはできないであろう。思い出の中には、八ファニーの薔薇、母兔の死、4th of Julyの夜、櫻桃狩りV〔日記、明治三十七年（一九〇四）八月五日〕が生きているし、二人相向へば涙は自ら二人の眼に浮びて我等の心は一となる。彼女と余とは不可思議なる縁の線に結ばれたる魂なる可し。V〔日記、明治三十七年（一九〇四）九月一八日〕という実感が、当時の有島の支えの一つになっていたことも事実なのである。しかし、現実のフ

ファニーは、遂には、その△純潔▽も、△天才の如き直覺と嬰兒の如き單純▽も、△時▽によってすべて△埋め盡▽され、△一度此自然の揺籃を出でん時、夢は vanity と交換せらる可き▽ものでしかないし、△愛の語る可き時は遙かなる未來なり。▽と思わなくてはならない存在であった。このような、いわば厳しい現実が実感されればされるほど、非現実の、虚像の世界での可能性追究に力点がおかれる無意識的な心の動きが問題になってくるのである。

### 三

虚像としてのファニー像の中に写し出された、有島の新しい人間観の一つの特色は、先にみた感想からも明らかのように、少女でなくなってしまったファニーへの失望感というかたちで表わされているが、これは一種の魔性嫌悪といふことができるのではないだろうか。有島はその状況を、△天使▽が、△地の暗影深き人▽となつてしまったと表現しているが、△天使▽に対する△地の人▽は、清浄無垢の神聖を基礎におく聖性の象徴に対する△罪多き▽△暗にある反逆の人▽〔日記、明治三九年（一九〇六）二月八日〕の本性の謂である魔性を持った存在を意味しているのである。これは、フレンド精神病院での看護夫生活を通して問題になってきた、人間の内面にひそむ暗黒面、すなわちカインの末裔意識と本質的には等質の否定的人間性を、少女ではなくなつてしまった女性の中に見るといふかたちで顕現化されているところに、有島の人間観の一つの特色を見出すことができるところでもある。たしかに、このような、いわば墮ちた偶像ともいふべき女性観は、有島のその後の生活の中に、か

有島武郎研究 — ファニー像にみられる聖性憧憬の考察 —

なり根強く定着している事実を見出すことができる。たとえば、瀬沼茂樹氏が指摘しておられるように、妻安子に対して愛の危機を感じた時の、△今の瞬間に於ては、凡ての女性は厭はしく、獸の様で、虚榮心と依頼心の結晶の様に思へる。▽〔日記、明治四二年（一九〇九）一月三十一日〕という女性嫌悪の心情—同様の記事が明治四一年二月二日の日記にも見られる—も、その一つの顕れであろう。しかも、有島の女性嫌悪が、単にある特定の対象に限定された感情的次元での反応だけではなかったことは、この米国での生活の時期に、ファニーと同様に聖性を持った存在として、しばしば日記の中に姿を現わしているリライに対しても、一方では△天使▽〔日記、明治三七年（一九〇四）八月五日〕であるとしながら、他方では、△「E」を思ふ情は今も聊かも減ずる事なし。されども同時に余は彼女を厭ふ。余は何故なるかを知らず。▽〔日記、明治三七年（一九〇四）八月三〇日〕、△此夜「E」余にうれしき笑を與へぬ。彼女の笑ひは余の涙を誘ふ。されども彼女は厭はしき所あり。余は彼女が今にして女の vanity より救はれん事を祈る。▽〔日記、明治三七年（一九〇四）九月八日〕と云っているように、より現実的な部分において—先にみたファニーと同様—その限界状況を、人間の本質として内在する否定的状況として把握していたものようである。おそらく、有島が女性の中に見ている否定的人間像の本質は、△非人間的な▽△祖先から本能的に伝へられた淫亂の血（男子を征服せんとする女の強大なる武器）▽とも云うべき△悪魔性▽〔檜山京子宛書簡、大正八年（一九一九）九月二九日〕に通じているのであろう。「或る女」の菓子にみられる否定的側面は、こうし

た有島の魔性観の一つの具体的な姿として位置づけることもできる  
ように思われるのである。

さて、この時期は、先にフレンド精神病院での看護夫生活の意義  
の考察でみたように、有島が、人間疎外をもたらすすべての桎梏、  
なにかなくキリスト教倫理の束縛から解放された新しい人間追究  
を志向せんとする、その「首途」Vともいふべき時であるにもかかわ  
らず、人間の、自然な、あるがままの姿を、あえて否定的な側面と  
して嫌悪しているということは興味深いことである。このことは、  
有島の「赤児」の如き信仰V渴望にあわせて、キリスト教倫理の影響  
の、いかに根深いものであったかを知ることができるところでもあ  
る。そして、そのことが、有島における少女憧憬のたならぬさまの  
一面として表わされているのであろう。ここで、当然問題になるこ  
とは、有島が嫌悪というかたちであらわしている否定的人間観をい  
かにして克服しようとしているかということである。意識的には、  
それとは全く逆の方向に、つまり否定の根源としてのキリスト教倫  
理を否定せんとしているにもかかわらず、無意識の世界では、否定  
の事実即して新しい人間像を求めようとしているだけに興味深  
いわけである。可能性としては、楽天的な聖性主張、魔性の聖性へ  
の転換の可能性の主張、あるいは魔性と聖性とを同時に抱括する  
新しい原理「人間観」の発見の可能性の主張があるが、やがて、文  
学の世界でその中心的課題として追究してゆくこの問題を、有島自  
身の生活の中で模索しているさまを、さらに「ファニー」観の中に見よ  
うと思うのである。

#### 四

三回目の出会いのときの感想を通して、有島の基本的人間観の特  
色を魔性嫌悪というべきものとしたが、これは、その背後に聖性  
への憧憬を予測することのできるものなのである。それが、ファニ  
ー像のなかに、はっきりしたかたちで顕われるのは、三回目の訪問  
以後、つまりフレンド精神病院での看護夫生活のなかや、その直後  
の四回目のクロウエル家訪問のころの感想のなかにである。

病院を辞した有島は、フィラデルフィアでアーサーと落ち合い、  
四度アボンデルへと向ったが、停車場にファニーたちが出迎えて  
いる姿に接したときの思いを、

余の心はファニーのそれと相合しぬ。彼女はかほゆし。彼女の恨  
多き眼に見入らるれば、天使の前に立ちし心地して余の罪深き眼  
は自ら恥ぢるに垂るゝなり。〔日記、明治三七年（一九〇四）九  
月一六日〕

と記している。この感想からも明らかに知られるように、ファニー  
の聖性が、有島の魔性の告発の前提になつてはいるが、それと同時に  
ファニーの聖性に対して、「あゝ、ファニー、余が生の清き  
導者V〔日記、明治三七年（一九〇四）八月二日〕とが、「嗚呼、  
Fanny を思ふ。汝天使よ。純潔の化身よ、來りて余が汚濁の中に  
圍まれたる靈を擁護せよV〔日記、明治三八年（一九〇五）一月二  
二日〕」という部分に、はっきりとあらわれている、有島自らの聖化

への期待<sup>(註7)</sup>、がこめられていることを、あわせて知ることができるのである。

聖性への憧憬という単なる漠然とした心情だけでなく、その中に自己の聖化への期待が意識的にこめられているという背景には、おそらく、当時有島が愛読していたダンテの『神曲』などの影響を見ることのできると思われる。なぜならば、もともと、プロテスタンティズムのキリスト教信仰において聖化を問題にする場合、△聖化 (Sanctification) は義認によって生じる新生の過程をしめす語法であり、△洗礼の効果と結びついているが原理的には聖霊の自由なる恩恵の贈物とみなされている▽ものであるとするのが基本的な考え方なのである。もち論、人間の側の△信仰、自己抑制と倫理的生活を通しての主体的献身を必要とするものとされている▽が、これとても△神の自由な恩恵に従属的なもの▽なのだと言われているものだからである。<sup>(註8)</sup> 有島の信仰が養なわれた札幌独立教会は、その教義的立場や基本的な聖書理解の点においていささか問題があるとされており、新渡戸稲造との関係から接近したフレンド派も△人間のうちに与えられている善性を差し示し▽△「原罪」という言葉は、悪の力を強調しすぎている▽<sup>(註9)</sup>という、罪に対する性善説的教義を基本的には持つてはいったものの、それらの要因がすぐさま、有島に、いわばカトリシズムの信仰の世界で問題になる聖母マリアを原型とする永遠の女性への憧憬を内容とするような聖化への期待を持たしめる素因にはならなかったであろう。有島がこのような聖性憧憬をもったのは、したがって教会以外のもの、それも多分に有島化された形での憧憬であるだけに、カトリシズムの直接的な

影響というよりはむしろ、文学あるいは絵画の世界などを媒介とする間接的影響を考えることができるように思われるのである。<sup>(註10)</sup>

さて、聖化への期待をこめて追求されているファニーの聖性の中に、それでは永遠の女性の完全なイメージを見出すことができるかどうか、例えていうならば、ダンテに対するベアトリーチェのように、その背後に聖母マリアの存在を見ることができるとかどうかと、それは否定的である。なぜならば、先にも述べたように、ファニー像が、有島の内面の変化によってその姿を変えうる、非常に恣意的な虚像であるということが、永遠の女性としての絶対的保証をどこにも見出すことはできないものであることを物語っているからである。それにもかかわらず、有島がファニー像の中に聖化を可能にするものへの期待を抱いているということは、もっとも有島的なかたちにおいて、ファニー像の中に永遠の女性像を刻んでいるからに他ならないのであるが、そのような意味での限定されたファニー像における聖性とはいったいどのようなものだったのである。

## 五

ここで再び四回目の出会いのときの感想を思い出してみたいと思う。先に引用した九月一六日の日記に基づいて、一七日にも、△彼女は其恨多き眼に泌み入る如く余を眺めぬ▽とあるように、有島にとって、ファニーの魅力のポイントは、彼女の△恨多き眼▽だったことを知ることができるのである。このことは、フレンド精神病院に勤務しているときに、ファニーを思い出しているところでも△恨

み多き眼に涙湛へてV〔日記、明治三七年（一九〇四）七月二四日〕  
いるファニーが語られているし、翌年の二月一八日の日記には、  
下宿の主人ピーボディの二人の娘の姿を通してファニーに思いを馳  
せているところでも、彼女の純潔なる恨多き眼は、余が一片の回想  
の下に髣髴として現はれ来るなりVと述べていることから、けっ  
してその場かぎりの感想ではなかったことが窺われるのである。思  
うに、有島は、眼や瞳、あるいはそれに関係ある表情などに異常な  
までに関心を持っていた作家であったが、形象化の度合の高い存在  
であるほど、何らかの意味において眼にポイントがおかれているこ  
とが、一つの人物造形上の特色でもあるわけで、その傾向の祖型と  
もいふべきものがファニーの魅力を一つまり聖性を表現する方法  
として用いられているということは興味深いことである。<sup>(註12)</sup>とくにそ  
れが、恨多き眼Vという、考え方によつては大變通俗的ではある  
が、本来ならば宗教にかかわる、どちらかといえば堅苦しい問題で  
ある聖性理解に対して、人間論的アプローチを可能にする魅力に富  
んだ表現であるということができるのである。もち論、有島が、意  
識的には、天使、純潔の化身、有島をして聖からしむる者の眼とし  
て描いているのであって、積極的に肯定的な表現を意図したもので  
あることは云うまでもないことであろう。別のところで、ファニー  
の眼を、鳩のやうな眼V〔日記、明治三九年（一九〇六）九月四日  
原文英文〕と云い表わしているところがあるが、このことは、たと  
えば旧約聖書の「雅歌」一章一節に、  
「我が愛する者よ、見よ、あ  
なたは美しい、見よ、あなたは美しい、あなたの眼は鳩のようだV  
と歌われているように、美と柔和と謙遜の象徴としての表現であ

り、少くともこの文脈からは、それ以外の意味を読み取ることはで  
きないものなのである。しかし、何といつても、恨多き眼Vという  
言葉で表現された眼は、魅力的な眼ではないだろうか。有島がファ  
ニーの聖性を云い表わすのに、あえてこの表現をもってしている  
ということの背後には、何か、いわゆる聖性という言葉だけでは云  
い盡すことのできない魅力に対する無意識的な憧憬を秘めているの  
ではないかと考えるのは、はたして僻目であろうか。もち論、ここ  
で「或る女」の愛子の眼が、恨多き眼Vであり、その中に有島が純潔  
さと同時に淫蕩なものを見ていることを前提にした論として展開す  
ることも可能ではあるが、十数年後の作品の用例をもって説明する  
のではなく、あえて、有島のこの時点における聖性憧憬の内部に、  
恨多き眼Vという言葉によつて表わされるような、人間観におけ  
るもう一つの可能性を、原型として実証もしくは推論できないかと  
思うのである。

さて、それでは、有島の日記、書簡などの伝記資料の中に出て来  
る眼の用例から、恨多き眼Vを説明することができるかとい  
うと、どうも不可能のようである。ただ、わずかに、友人増田英一に  
ついて、  
「彼面至て平和なるもの、如きも、心中甚だ多恨の性に属  
すV〔日記、明治三二年（一八九九）五月一三日〕といひ、彼の  
多恨の涙眼かの石に向ひけん、此の木をや眺めけんと思へば、余は  
髣髴として彼を描き出す事を得るなり。V〔日記、明治三六年（一  
九〇三）九月二一日〕といひ、  
「恨多き眼Vの用例はみられる  
が、これがファニーの眼の説明にすぐ結びつくものであるか否かは  
速断しかねるところである。その他、恨多き眼Vの意味を明らか

にする方法としては、この言葉の出典を調査することも考えられるが、それも目下のところ定かではない。とすれば、あくまでも一つの仮説として推論をすることになるのであるが、有島の女性観の解明から、その最も魅力的であるとするポイントとの対比において明らかにする他はなさそうである。

渡欧の船中で書かれた、△ファニーに捧ぐ▽と献辞のある日記に、つぎのような一文がある。

乗り合せていた二人の尼の姿に、眼をひかれた。「中略」私は、尼を見る度に何時でも特に心をひかれる。清きにしろ、汚れたものであつたにせよ、彼女等の過去が、私の想像に訴へて来る。人は僧院の生活、特に尼院の生活は、けだかさに心うたれるものがあると言ふ。無言の聲が、そこを統べ治めて居る。けれどこの二人の尼の顔を見て居ると、そんな話は信じられない。御覧、ファニー、何て身を委せ切つた面持をして居る事だらう。人眼をひくのはあの人達の面持なので持つて生れた顔付きではないのだ。あの人達の唯一の望みは處女マリアのやうになりたい事であらう。あの人達の面持で、その望みが分るやうな氣がする。いとしいファニー、あの人達の面持から、あなたのだいじい面影がとらへられるから、あの人達をぢつと見つめていたいのである。「明治三九年（一九〇六）九月二日、原文英文」

いささか長い引用であるが、この文章の中に、有島の基本的な、

有島武郎研究 ―ファニー像にみられる聖性憧憬の考察―

女性観とファニーに対する観方とを見ることができるよう思われるのである。ここには、尼僧たちに見られる聖性への願望と、その背後にあつて彼女たちにかく願わしめている△過去▽の生活の重さへの同情がみられるが、それは、生まれながらにして聖性を持った者に対するものではなく、汚濁に満ちた世にある罪の子人間としての自覚に基づいた△處女マリアのやうになりたい▽という成聖願望に対する同情なのである。有島は、この二人の尼僧にみられる成聖願望と、そのことを可能にする存在へのひたむきな信頼とを顕わした△面持▽を、ファニーの△面影▽と重ね合わせて見ようとしているのであるが、このことは、ファニー像に求められている聖性が、少くとも人間性を無視することのできないものであることを、かえってそれを存在の根拠としなければならぬものであることを表わしているように思われるのである。

思うに、米留学以前の有島の女性観―それは主として聖書の女性たちを通して表わされているのであるが―の中にも、たとえ聖性を求める場合でも、そのことによつて生来の無垢、無原罪の存在として、すなわち非人間的存在として変化してしまふことを望んでい

るのではなく、本来的な意味での人間性の回復を願うものとして表わされていたことを想起することができるのである。すでに指摘し<sup>(註14)</sup>たように、姦淫の女<sup>(註14)</sup>は、その汚濁に満ちた△醜悪悲惨▽な行為の背後には、全身全霊をもつて全愛を求めるものをもつていた女性であつた。この女性が、自らの愛の欠落を満たし、全愛を成就するために、あえて決断して犯したその行為を姦淫だとするキリスト教倫理からの魔性の女宣言に対して、有島は、人間の愛の中にある肉

欲の咆吼を、一方では否定的要素としながら、他方では、人間の否定すべからざる本質として、むしろ愛惜せずにはいられなかつたのである。また、その愛の成就のさまが、有島の一種の理想の女性として描かれている Poetic woman の中に、さらに明確に示されているのであるが、この女性とても、かつては罪の女、すなわち魔性の女であつたことを分らせるものを、その愛の行為の中に見い出すことができるものであつた。

このように、有島の理想とする女性像の本質を形成している聖性が、回復された人間性を意味していることは、もしもそれが仲保者ぬきで、無媒介のままでも可能であるとするかぎり、魔性の肯定ということになるだろう。それは魔性の内なる聖性の発見ということもできる、一種の人間復興の主張でもある。つまり、求められている聖性が、人間性の回復を意図しているということそれ自体は、プロテスタントイズムの正統的な信仰理解の中で考えられるものであるが、そうであるためには、前章において、聖化の定義でも示したように、あくまでもそれを可能にする仲保者キリストとの関わりが問題となるのである。たとえば、椎名麟三が「マグダラのマリヤ」〔昭二九・三〕を書いたとき、罪の女マリヤが、魔性の女から聖性の女へと変身をとげることのできた契機として、復活のキリストを描いていることも、あるいは、矢代静二が、「宮城野」〔昭四一・一二〕で娼婦宮城野に聖性を与えることができたのも、彼女が△はくのマグダラのマリヤ▽であるためであることを、つまり△イエズス▽との出会いを通して、△マグダラのマリヤのように墮ちに墮ちた、いやしい形而下的生を送っていた、愛に飢えていた

女性が、澄みきつた形而上的な愛に目ざめることもあり得る▽、△鮮やかな変貌をとげられた人が、かつて現実にいたということ▽がその背後に―たとえプロテスタントとカトリックとの差はあるとしても―作者の一種の信仰告白として語られていることも、その一つの例であるということができよう。先にみた有島の Ego, Poetic woman の魔性から聖性への転換とてもその例外ではないのである。しかし、ファニーの場合、どこを見ても、キリストの存在によつて聖性を回復したファニーであることへの讚美はみられないのである。聖母マリヤですら、△聖母▽であるための基本的条件としてキリストの母であることが前提になっているのであるが、単に表現の問題としてだけではなく、本質的な問題としてキリストがぬきにされているということは、有島にとって、ファニーの聖性は、魔性の転換したものではなく、魔性と聖性との同時的存在として把握されているということになってしまふのである。

魔性と聖性との同時的存在の可能性をみることもできるといふことは、仲保者キリストをぬきにして考える場合、それは、まず未分化の状況という意味での混在として位置づけることができる。あるいはまた、すでにフレンド精神病院での看護夫生活の意義を考察した際に指摘したように、リリオやファニーを聖なる存在としていたことが、人間の内部にある本然的要求を罪だとするキリスト教倫理への反撥からくる一種の聖化現象であるならば、有島の、ファニーに対する聖性への期待が、その本来の意味から逸脱した聖性、すなわちキリスト教的価値観からすれば、回復される以前の人間性そのものを、△天使▽とか△純潔▽という言葉で表わしたにすぎない、

一種のごまかしを内容とするものでしかないことにもなってしまうのである。もち論、そこには、そうまでしてでも、棄て切ることできぬ人間性の回復を願う気持ちの顕われを見ることができるといふことにもなるが、いずれにせよ、魔性と聖性ととの厳密な意味での差は消滅してしまうという意味では、未分化のものと共通の聖性願望であるということができるのである。このことを、もう一度ファニー像に即しているならば、意識的には嫌悪すべきものとして否定されている魔性―地の暗影深き人の―と、聖性―天使であり、純潔の化身である少女、ファニー―との同時的存在を意味していることになるだろう。しかも、否定されている魔性の中に、有島の理想とする女性像の存在を支えている人間性を内包しているという内的矛盾をも包含した聖性として、有島に期待されているということになるのである。

有島の、このような期待、いわば一種のアンビバレンスともいふべき聖性と、魔性ととの同時的存在の可能性への期待を、象徴的に表わしているのが、ファニーの△恨多き眼▽であるということとはできないであろうか。△恨多き眼▽、それは、何かしら人を誘きつけるあやしい魅力をもったこの言葉であるが、少女のもっている清浄無垢な聖性と、姦淫の女や Poetic-woman であるベタニヤのマリヤの女性としての魅力、女性としての愛に関わる苦惱、つまり人間としてのトータルな魅力の重さに充分堪えるものと思われるのである。有島が、ファニーの聖性を、あえてこのような言葉で表現しなければならなかったのも、おそらく、この言葉に対する無意識的な期待がこめられていたからに他ならないと思われるのである。

有島武郎研究 ―ファニー像にみられる聖性憧憬の考察―

## 六

もしも、△恨多き眼▽が、ファニー像における聖性と魔性との同時的存在を可能にしている言葉であるとするならば、それは人間論的に云えば、一つの存在の中に相異なる両極端のものを同時に認めることのできる、人間としての完全さを願う思いがこめられているということになるだろう。有島の理想的女性像に即しているならば、それは堕ちた偶像としての否定的女性像と、永遠の女性の面影を宿す肯定的女性像とが、同時に、調和的關係を保ちながら、一つの人間像として完成してゆくことへの願いを、その中に見ることができるといふことになるのである。米国留学当時の有島としては、それは、もち論、あくまでも聖性憧憬、聖化願望というかたちで認識されているわけであるが、ファニー像に対する有島の聖性憧憬の考察を通して、有島の内部においてやがて顕現化する願望を、それを可能にする新しい論理追究の必要性をも含めて知ることができたということになる。この問題については、さらに、有島の精神構造の解明、作品分析とを通して追究してゆかねばならないが、一つの予測としては、「或る女」の菓子、愛子、「三部曲」のナアマ、デリラ、マグダラのマリアの中に形象化されている成聖願望と本質的なつながりを、ファニー像における聖性憧憬にみるることができるのではないか、という意味においても、有島の人間追究を志向する一契機として位置づけることができるように思われるのである。

註1 有島武郎集解説 「現代文学大系22」〔昭三九・一一〕筑

摩書房

- 註2 留学前後の有島武郎(下)「文学」〔昭三九・一二〕
- 註3 高橋和巳 解説戦後文学の思想「戦後日本思想大系13 戦後文学の思想」〔昭四四・二 筑摩書房〕
- 註4 この時期の有島とクロウエル家の人々との交渉については註2の他に、瀬沼茂樹氏の「有島武郎未発表書簡四十六通(一)」〔「国文学」昭三九・八〕、武田勝彦氏編の「有島武郎・英文書簡八通」〔「文学」昭四八・四〕などがある。
- 註5 拙論 有島武郎研究―自然観にみるキリスト教受容と定着化の考察―「国語教育研究」第八号〔昭三八・一二〕
- 註6 結婚前後の有島武郎(下)―教授時代のうち―「文学」〔昭四一・一一〕
- 註7 「フランセスの顔」自註〔足助素一宛書簡、大正五年(一九一六)三月二二日〕では△純化▽という言葉を用いている。この△聖化▽から△純化▽への変化は、有島の内面的変化のもう一つの顕現でもあろう。なお、有島の少女憧憬への関心を示す発言には藤森成吉の「娘」〔「文章世界」大七・九〕への寸評〔書簡、大正七年(一九一八)九月一四日〕がある。
- 註8 「キリスト教大辞典」〔昭四三・六 教文館〕、「キリスト教組織神学辞典」〔昭四七・一二 教文館〕の△聖化▽の項参照
- 註9 海老沢有道・大内三郎 明治キリスト教の諸相「日本基督教史」〔昭四五・一〇 日本基督教団出版局〕
- 註10 レオ・ロステン編、後藤真訳「アメリカの宗教」〔昭三一・一〇 時事通信社〕
- 註11 有島が、この時期にダンテの「神曲」を非常に熱心に読んでいたことは、日記により明らかであるが、とくに、Gustave Doré〔1833-83〕の描いた「神曲」の挿絵〔日記、明治三七年(一九〇四)九月一九日の記事に購入したことが記されている〕は、難解な「神曲」理解のために、また、具体的なイメージ形成のために役立つことであろう。
- 註12 「『瞳なき眼』まで」と題して、昭和四八年五月三十一日、梅光女学院大学国文学会例会にて研究発表し、この問題についていささか言及した。本論は、その前半の部分を補訂したものである。
- 註13 拙論 有島武郎研究―「或る女」の成立をめぐって(四)―「梅光女学院大学国文学研究」第八号〔昭四七・一一〕
- 註14 拙論 有島武郎研究―「或る女」の成立をめぐって(一)、(二)―梅光女学院大学国文学研究第四、五号〔昭四三・一一 四四・一一〕
- 註15 マグダラのマリア「魔性と聖性」〔昭四八・六 教文館〕